

馬酔木

―新薬師寺と浄瑠璃寺―

浜田 道雄

馬酔木はとくに珍しい花ではない。私の住む東京の西郊でも春たけなわのころ散歩すると、他人の家の庭や垣根に白い釣り鐘型の花を連ねて咲く姿をよく見かける。だが、私は馬酔木は奈良の風景にこそふさわしい花だと思っている。

はじめて馬酔木を美しいと思ったのは、一人暮らしをはじめてしばらくした春奈良へ旅して訪れた新薬師寺のある夕べのことだった。山門をくぐるとすぐにどこの山中の古寺かと思うような本堂がのそっと見えて、その脇の離れ小島のような巖の上に一群の馬酔木が満開の花を咲かせていた。

古い歴史を負った寺の名には相応しくない寂れた庭に、薄闇に浮かび上がる白い釣り鐘の連なりはひどく淋しげで、万葉集にある大来皇女の歌

「磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど 見すべき君が在りと言わなくに」
を思わせた。

今年の春、やはり彼岸のところに浄瑠璃寺を訪れた。九体の阿弥陀仏と吉祥天像で知られるこの木津川沿いの山中の寺は行くに不便なところで、これまで何度も奈良を訪れながらついぞ足を伸ばしたことはなかった。

この寺にも馬酔木があった。世に知られる寺にしては不似合いな小さな山門の手前で、その木はこんもりとたくさんの花をつけていた。堀辰雄が「浄瑠璃寺の春」で「花というものが今よりかずつと意味深かった万葉びとたちに、ただ綺麗なだけならもつと他にもあるのに、それらのどの花にも増して、いたく愛せられていたのだ」と書いている、その馬酔木に違いない。

静かな山里の寺に咲く馬酔木はやはり美しい。だがこの花はほんのりと紅がかって艶やかで、同じ山寺に咲くとはいえ新薬師寺の花に比べればもの思わせる風情では劣る。

私はやはり新薬師寺の馬酔木が一番美しいと思う。馬酔木は奈良で咲いてこそ映えると思うのも、うら寂れたこの寺でひっそりと咲いていた白い花の印象が強いからなのだ。

もっともその馬酔木もいまは剪定されて枝を落としてしまい、すっかり寂しくなっているのだが。